

新聞は、毎朝夕に配達されてくるものだから、新聞の題字などを気にとめて見ている人は、ほとんどないようで、朝日をとっているところへ読売が入っていたりしても、何となく勘でわかる、といったくらいなものだろう。

だからつい一年くらい前まで毎日新聞、朝日新聞の「新」の字の扁の部分に、横の線が一本多い隷書であったことを気づいていた人はほとんどない。読売の「読」の字の傍の頭にある土が十になつて来たことは、少しは気づいていた人もあつたが珍しがられていた。

こんなことも、毎日、朝日の題字はともに隷書で、その隷書も朝日は隷書がすたれかけた唐時代の書風だつたりしたが、かえつて何となく時代めいた感じのあるのにはれて使っていたのではあるまいか。こんな新聞の顔とでもいった字を今ごろになって通用体に改めるのも、ひとつ時代風潮を感じさせられる。

「新」の字の扁の部分は「辛」と「木」とをあわせ、傍に「斤」の字を附けたものだから、一本横の線の多いのが本義なのではある。まあ初めてこの題字を決める時分には、やかましい人々が生きていたんだらうと思われ。

話のついでに思い出されるのは、新聞の題字も「報知新聞」は古いのは西川春洞先生、新しいのは豊道春海先生である。もう廃刊になつた「毎夕新聞」は武田霞洞先生であつた。新聞の題字に精通した人が何かの雑誌に書いていたことがあつたが、惜しいことにその誌名をすっかり失念してしまつた。

今の「読売新聞」は印南溪龍先生。この種のもので私の書いたものも少しあつたが、戦中戦後に、「二六」「中外」「都」「万朝報」などと時を同じくしてなくなつてしまい、地方で「熊本日日」「北陸新聞」

が残り、現在でも特種なものでは「仏教タイムス」「交通新聞」「鉄道公報」などである。

新聞などのほか広く世間に知られていた刊行物では通信省(今の郵政省)のものでは、「郵便規則」や「通信公報」などはおおむね鳴鶴先生系の近藤雪竹先生、のちに田中真州先生の書である。鉄道の方は「鉄道時刻表」その他日本中、国鉄の駅ならどこでも武田霞洞先生の字が見られ、その他の各省でも大衆と接触する部署には、その省ごとにひとつの型があつて、何々省の人々は何風の書とほぼ決まつていた。

したがつて本屋の棚など見ていると隷書・楷書の厳しい書のもの、は、法律関係や辞書の類に多く、行書のものには文学書などが多く、筆者も大体いくつかの流になつて来た。

そういう中で、私は仕事の関係から隷書・楷書を多く書いていて、法律関係の出版社と懇意であつたせいか、「民法総論」だとか、「経済原論」「何々判例集」といったものの背文字を書かされ、今でも街の古本屋などを覗くと、古本の背文字に厳しい字がむかしのものに見られ、懐かしいやら恥ずかしいやらである。

戦前の中のは大抵古本となつて近刊の書棚には見えなくなつていゝる中で、内閣の「法令輯覧」とか国鉄の「法規類抄」とかいつたものはまだご用免にならずに、田舎の村役場へ寄つても列んでいる。もつともこれは綴じ込み式の革紐があつて中味は常に新しく交換されても、背文字・表紙は換えないものだからでもあるのだらう。

こういうものであまり苦勞して書いたという思い出もないが、戦前に神武天皇紀元二千六百年に当たるとする時運に近づく中で、もう日中事変が第二次世界大戦に入らうとする時運に近づく中で、戦時意識の昂揚も兼ねて、その数年前から内閣に「紀元二千六百年奉祝事務局」が置かれ、大規模な奉祝計画が企画、実施されつつあつた。その国民版宣伝誌として「紀元二千六百年」という七字の題字を持つ大判の雑誌が月刊された。(つづく)